編者はしがき

本巻に収められている「常楽篇 久遠常楽の道」は、谷口雅春先生の教えとは如何なるものであるかの全体像を知る上で、欠かすことのできない一篇である。本全集『生命の實相』全巻に鳴り響いている無限大の真理の全相が、本篇一篇でその全体像を過不足なく説き尽くされているからである。

本篇のタイトルでも分かるとおり、谷口雅春先生の教え即ち「宇宙の大真理」を悟れば、一切の不幸、一切の病気、一切の苦悩が消え去り、ただ神の造り給うた世界のなかで満ち足りた生活つまり「常楽の生活」が実現すると述べておられる。

「人間は仏子であり神の子でありますから完全な自由を有するのです。これは釈迦の自覚であり、またキリストの自覚でありました。この自覚を万人に伝えんとするのが吾等の光明思想運動であります」(三頁)

この一文から始まる本篇は、なぜ人間はその「常楽の世界」に住んでいるにもかかわらず、そのことを忘れ、不幸、不自由、病気の苦しみに喘ぐのか、その問いに、谷口雅春先生は答えられる。

「吾々は仏子であり神の子でありますから、無限に完全な自由を有していまして、不完全不自由などということはないのであります。それだのに不自由不完全な相を呈しているのは、本当に不完全不自由だからではなく、自分自身で眼を閉じて自分の完全な自由さを見ようとしないのであります。誰も自分の眼を閉じさすものはないのに自分自身が眼を閉じて、『神の子』としての無限自由の実相を見ないのであります。見えないのではない、見ないのであります。ここが肝腎であります」(四頁)

自ら目を閉じた人間は、神によって「エデンの楽園」を追放されたと思い込み、あり

もしない不幸や病気や苦悩に勝手に怯え、「楽園」から追放された恨みを神に向ける。

しかし、苦しみの深淵に沈んだ人間は、それでも「神」を呼ぶ。その事情を谷口雅春先生はこう述べておられる。

「吾々が苦悩の底から、また悲しみの深淵から、神を呼ぶのは一見『外』にある神を呼んでいるかのように見えますけれども本当はそうではないのであります。吾々が『苦しい時の神頼み』をしたく感じますのは苦悩というものは、神を呼べば消えるということを本能的に知っているからであります。換言すれば神無き事が苦悩であるということを先験的に知っているからであります。誰が先験的に知っているかと言いますと、彼自身が知っている。彼自身が神を先験的に知っているのは、彼自身のうちに神が本来宿っているからであります」(九頁)

谷口雅春先生は、自己の内に神を宿す人間には、理論的な無神論者はいても実際生活上の無神論者はいないと断言される。そして、「神を呼んで助けを求める人間は弱い人間だ」といって宗教を嫌う人間こそ、実は弱い人間であるとも言っておられる。なぜ

なら、「神を呼ぶことの出来ない人が絶望したときは、それこそ本当に絶望です。何故ならその人は『一層大なる力』より汲むことを知らないからです。如何に平常強き者も、自己に限られたる力以上の力に汲むことを知らない人は弱き人」(一四頁)だからである。

そして、いよいよ谷口雅春先生は、大真理の説法を始めていかれる。神とは我らの生命の本源であり、我らがそこからいくら汲み出しても枯れることなく無限にあらゆるものが供給されること、神の世界すなわち実相世界は、我々の肉体上の五官や六感を超えた厳然たる世界であり、逆に我々の肉眼で見えるこの世界こそ実は陽炎のように不確かな、常に変化する世界である。

そして谷口雅春先生は、この世で主役顔をする「物質」と「肉体」とに話が及ぶ。

「『生長の家』では、物質は存在しない、それは『念の影』であると言うのでありますが、もし『物質』というものが見えるがままの状態に実在しているとしますならば、『物質』なるところの肉体はそれ自身決して『苦しい』とか『痛い』とか、『病気』

だとか、『死ぬ』とか感ずることはないので あります。『苦しい』とか『痛い』とか、『病気』だとか、『死ぬ』とか思うのは、これは『無感覚なる物質には在り得べからざる心』であります。『物質には在り得べからざる心』があらわれて、物質にはあり得べからざる『苦しい』とか、『痛い』とか、『病気』だとかを思う。あり得べからざるものが、あり得べからざることを思う。――これが『病い』であり、『苦しみ』であり、『痛み』であり、『死』であって、これらは本来あり得べからざるものであります。本来あり得べからざるものを有るが如くに告ぐる心はそれ自身『矛盾の心』『自己撞着の心』であるからそれ自身存在し得ない心であって、あるかの如く見えているけれども『本来無い心』なのであります。『本来無い心』――これを迷いの心と言う」(七一～七二頁)

こうして、現象界の正体を白日の下に晒した上で、谷口雅春先生は神のみ実在であり、人間は神のすべてを受け継ぐ「神の世継」であり、一瞬たりとも「常楽の世界」から足を踏み外したことのない存在であることを説かれていく。

この「常楽篇」という誰でも読めて誰をも納得させる迫力ある文章を通して、全人類の前に深奥の真理が開顕されていく様を是非熟読玩味して頂ければ幸いである。

なお、本巻には続いて「参考篇」が収録されている。この篇は、アメリカでのキリスト教の中で派生した新しい一群の光明思想(ニュー・ソート)の紹介であるが、ここでも、谷口雅春先生同様「心が人生を支配すること」が述べられており、なかでも「人間は決して老いないこと、老衰しないこと」が詳述されている。併せて精読をお願いする次第である。

令和元年七月吉日

谷口雅春著作編纂委員会